

転生物語

ハエトリソウ鈴木系

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

某動画サイトで物語シリーズの野生の公式見てたら思いついた。インド異聞が来るまでの暇つぶし。作者はニワカです。

目次

転生物語

1

転生物語

「わかってた、ハズだった。

目が覚めてみればいわゆる第二の人生というヤツで、どんな風に喋ってもうさんくさいと言われ。

大学にはきつと詐欺師が天職だろうという陰気な奴と、腕つぶしの強いえせ京都人の女がいて。

無精だったせいか、アロハが楽だと気づいてずつと着るようになり。

ひげも伸び、なんやかんやと思うところも出来て、彼はやつとこ覚悟を決めた。

「仕方がない。ちよつくら全国行脚しますか。

手始めに、ちよつとばかり運の悪い高校生と、吸血姫を手助けするため。

彼は全国津々浦々、「犬も歩けば棒に当たる」理論で、修行の旅に出るのであった。これがAとX、どちらの世界線であろうと、本来の筋書きを通すため。

「そうしていたの、だが。

薄々は気づいていた。それでも、にわかには信じられず。目の前の幼い少女と、その半歩後ろに佇むカソック服の男を凝視する。

「なによ、セカンドオーナーが子供で不服？」

滞在許可上げないわよ、と勝気な瞳がこちらをにらみつける。傍らの男が、こちらの挙動不審な動きにさりげなく拳を握った。その動作を見て我に返る。

「ああいや、聖堂教会の人がいるとは思わなくてね」

咄嗟に言葉を投げつける。ロリ凜ちゃんの説明にも上の空。

そつかー青春じゃなくて運命のほうだったかー、とコツソリとため息。

なんか色々覚悟決めてたのがあほらしく思えてくる。

ちよつと話聞きなさいよ、とキレかけている彼女に今度こそ向かい合う。

ー慌てない、慌てない。呪文囁むからね。

そんな幻聴が、聞こえた気がした。

—————

彼、つまり衛宮士郎にとって、今日は激動の一日だったといつてもいい。

友人に弓道場の掃除を頼まれ、超常の戦闘を目の当たりにし、一回は確実に殺された。

そう思ったのになぜか生きていて、帰り着いた自宅でまたも殺されかけ、少女に命を救われた。

その上、その少女は自分をマスターとか言い出すし、かと思えば自分の同級生を切り殺そうとするし。

まさしく混乱の極みだった。それでも学生服についた大きな穴は、彼がランサー、とかいうものに刺殺された証として残っている。

まごうことなき、現実であつた。

そんなワケで、彼は今教会に向かつている。なんでも、聖杯戦争には監督役というものがいて、申し立てれば保護してもらえとか。先輩魔術師の遠坂凜に先導されて、彼はそこへ向かつていた。最後尾を、黄色いレインコートをまとつた少女が歩いている。

三人分の衣擦れと、鎧が起こす金属音。

黙々と歩くうちに、だんだんと目的地から逸れていることに気付く。

「なあ遠坂、教会に行くならこつちのほうに近いぞ?」

「そのことだけど」

疑問に思つた士郎に対し、とびきりの笑顔を向けてくる遠坂。セイバーとそろつて、僅かに身構える。

「衛宮くんは、ちよつと会ってもらいたい人がいるのよ」

こつそり入つてたのも同じだし、と続ける顔には、微かな怒りが感じられた。

寂れた建物に彼らは来ていた。

二、もしくは三階構造の建物は、どうやら学習塾だったようで、どの部屋も例外なく机と椅子が散乱している。そしてそれらに被さつたホコリの層が、この建物が使われな

くなつてから随分とたつていることを知らせた。

端的にいつて、夜に入りた場所ではなかった。

しかし、二人からの訝し気な視線もなんのその。衛宮の前ですつかり猫を被るのをやめた彼女は、確信をもって足を進める。

「衛宮くんも一応は魔術師なんだし、専門家がいれば心強いでしょう。腕は悪いけど、知識は豊富だから」

安心して頂戴、と彼女は続ける。助けてくれるかも、と。なんのつもりかわからないが、遠坂のことを「いいヤツ」と断じる彼は、のこのこ彼女についていった。ため息をついて、セイバーも続く。

目前に少しだけ、光が漏れる教室が見える。その扉を、遠坂凜は開け放った。

建付けの悪いドア。舞い散るホコリ。

その向こうには――アロハシャツのおっさんがいた。

「おお、凜ちゃん。やつときたのか」

などと、アロハシャツのおっさんはのたまった。ホコリだらけのテーブルをビニール紐で連結していて、その上に座ってこちらを見ている。全体的に小汚い印象を受けた。

いや待て、そんなことよりも。あの遠坂を、「凜ちゃん」だと……！

「ちよつと、ちゃん付けはやめて頂戴つて、この前会った時言つたわよね？」

「いやいや、やめようとは思ったんだけどねえ。僕は凜ちゃんの小さいころを知っているせいか、どうしても慣れなくてね。過去を振り返るのはオジサンの性だ。ここは、寛大な処置に期待するさ」

そう言つて、にやりと笑うその姿。手慰みに火のついてないタバコを弄ぶ様子には、この問答に飽きているような気さえした。

はあ、と遠坂のため息。

「まったく、今日はお客さんもいるんだから、しっかりしてよね」

「ふうん——うん？」

こちらに、見透かすような視線が送られる。その視線が左手で止まる。令呪の宿つた、左手に。

「はっはー、なるほど。こりやまた面倒そうなのを拾つたワケだ。神父さんは喜ぶだろう。教会にはもう行つたのかい？」

「…まだよ。これから案内するところ」

「へえ…。どちらに転んでもいいようにか。優しいねえ。それともツンデレつてヤツかい。お父上も立派な成長に喜んでることだろう——全く、ご同慶の至りだよ」

「やめて。人をそんなうつついキヤラ設定にしないで」

ほんほん軽快に進む話題に、ついていけない。目を白黒させているうちに、注目され

ているのに気付いた。

「初めまして、衛宮くん。忍野です」

「は、初めまして——衛宮士郎です」

改めて見ると、ますます珍妙な恰好だと思う。サイケデリックなアロハシャツに、短パンとサンダル。先ほどまで寝転がっていたのか、所々ホコリがついている。無精ひげの生えた顔には、爽やかな笑みが広がっている。が、爽やかすぎてどこことなく胡散臭い。魔術師というより、ホームレスに見えた。というかホームレスそのものだった。少しばかり、遠坂が心配になる。

それでも遠坂が教えてくれた人だ。意を決して、話かける。

「えーっと。忍野さんは、助けてくれる人であつてる、いや、あつてますか」

「助ける？そりゃ無理だ」

「きみが勝手に一人で助かるだけだよ、衛宮くん」

——なんでさ。